住職任命権など本来信仰伝統に根ざすものが教団の行政機関によって執行されるようになった。ゆえに教団の権力を握った者が、宗制的には、伝統による信仰秩序も破壊、改変が可能となったのである。そこは敗戦によっても変わらなかった。また信仰伝統には、信者および布施（金）を獲得する力があることも確認しておく必要があるだろう。ここに集団脱走事件後の行堂問題が展開されてゆくことになる。

１９４９年に日蓮宗は「宗本一体制」（総本山身延山久遠寺住職が宗派の管長）とし、そのもとで新しく身延山に行堂を開設した。宗務総監（現在の宗務総長）であり身延山総務の増田宣輪氏が行堂の「正伝師」を名乗った。彼は遠壽院の五行（五度）成満者だった。この増田氏がじつは集団脱走事件の背後の首謀者である。事件当時、法華経寺は増田氏と打合せの上、秘密裡に行堂開設を進めていた。脱走首謀者が「俺たちにはお偉いお方が応援してくれるんでえ」と捨て台詞を残し、法華経寺に走り去ったのはそうした事情があったのである。彼らは事件を起こし、それを理由にして法華経寺に新たに行堂を開設する算段だった。しかし、宗派合同が挫折したため、法華経寺は行堂問題では１９７２年の

加行所であることを刻印する
遠壽院境内の石柱
（藤田庄市撮影）

合同成立まで表面に出てこない。一方、同年、遠壽院（仲北日誠住職・伝師）は日蓮宗を離脱し単立寺院として開堂した。

この年、何があったのか。

水面下の激しい動きのもと、すでに宗門中枢は身延山で行堂を開設することを2月か3月に決めていたようだ。そのため表面では仲北氏外しの動きのなか、宗門は9月17日に身延山信行道場を借りての開堂を決定。19日には入行考査会を開き、１２６名に許可を出した。宗門は遠壽院を無視したのである。しかし宗門には最も根本である修法に関する信仰伝統が欠如していた。可視的には遠壽院に伝わる祈祷本尊鬼子母神像や祈祷相伝書などの文物である。そこで宗門はそれらを引き渡すように強要したという。が、仲北氏はそれを拒否。ここに宗門権力と信仰伝統の葛藤を見ることができる。そのため、宗門の行堂は東京の喜徳教会（後、廃寺）が奉納した鬼子母神像を本尊とし、祈祷相伝書は五行成満者である小田教惇氏が行中に書写したものを用いることとした。

宗門行堂の話がまだ明らかでなかった1月には、東京修法師会は仲北氏に遠壽院行堂開堂を要望していた。が、宗門による仲北氏外しがあからさまになり、9月には遠壽院に縁のある宗門関係者は離反してしまった。ただ、仲北氏と檀信徒総代7名のみが信仰伝統を守る意思を固め、遠壽院は日蓮宗から離脱し単立寺院の道を選ぶ。そして開堂を宣言。この時、宗務当局は遠壽院は日蓮宗ではないので入行者は懲戒規定により罰則の対象となるとの通達を出した。だが44名（うち初行29名）が入行した。重要なのは、単立化を果たせたのは、戦後新憲法と宗教法人令（当時）に基づく信教の自